# 方略の主観的な有効性とフィードバックが課題成績の評価に与える影響

金木　淳

学力社会である現代を生き抜くためには自分の能力を正確に評価し、能力を伸ばすことが必要である。本研究の目的は事前評価（Judgement of Learning：以下 JOL）の正確さと事後評価（Self-Assessment：以下 SA）の正確さおよび課題の成績が良くなる方法について検討した。JOL とは将来行う課題のパフォーマンスを予期することであり、SA とはちょうど終えた課題のパフォーマンスの判断を行うことである。能力を正確に評価するためには先行研究よりフィードバックを行うことが有効だと述べられていた。また、主観的に有効な方略を用いて学習することでも、その能力が向上すると考えた。そこで、実験 1 ではフィードバックの種類（課題の解説あり条件、採点のみ条件、見直しのみ条件）が JOL の正確さ、SA の正確さおよび課題成績に及ぼす影響を条件間で比較検討することを目的とした。実験 2 では記憶方略の主観的な有効性評価の順位（1 位、2 位、3 位）による差が JOL の正確さ、SA の正確さおよび課題成績に及ぼす影響を条件間で比較検討することを目的とした。

実験 1 では、内容の異なる SPI 総合検査の言語問題を 2 試行行い、各試行の前に JOL を、各試行の後に SA を行った。第一試行と第二試行の間で上記 3 条件に分けてそれぞれフィードバックを行った。また、何を基準として点数の評価を行っているのかについて主観指標によって探索的に検討した。その結果、第一試行と第二試行では JOL の正確さ、SA の正確さおよび課題成績が向上したが、条件間では差は見られなかった。主観指標において、フィードバックを参考にするよりも課題を行った手ごたえを参考にしていることが示された。実験 1 において JOL の正確さ、SA の正確さおよび課題成績が条件間で向上しなかった原因として、課題の内容が簡単だったためにフィードバックを必要だと思わなかったことが考えられた。

実験 2 では、3 つの方略を主観的な有効性で順位付けした後、それぞれを用いて有意味語と無意味語の対連合課題を行った。3 つの方略は精緻化、体制化、理解監視であった。各試行の前に JOL を、各試行の後に SA を行った。その結果、JOL については有効性の順位が高いほどより正確であり、SA についてもその傾向が見られた。しかし、課題成績は有効性の順位に関わらず差はなかった。実験 2 において、方略ごとに課題成績に差があったことが問題としてあげられるが、そのことから、有効だと思う方略を用いることは、課題の成績を直接的に向上させないものの、課題の成績の事前予想を正確にすることが示唆された。

実験 1 と実験 2 の結果から、フィードバックを参考にすることは JOL の正確さ、SA の正確さおよび課題成績を向上させないが、自分が有効だと思う方略を用いることで評価を正確にできる可能性を発見した。しかし、用いたことのない方略の有効性を評価するといった現実場面ではあまり用いられない手続きを踏んでいため、今後の研究では一度方略を用いて課題に取り組み、そのフィードバックを受けた後に実験 2 と同様の手続きを行うことで、より現実の学習場面に即した研究になると考えられる。（安全行動学）